

「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」の試み

ー都市型エコミュージアム・市民協働による実践の記録ー

高橋 知*

1. 茅ヶ崎市の特徴と「都市型エコミュージアム」

市外や県外の方々に紹介をするとき、茅ヶ崎市は神奈川県の中南部に位置し、「湘南」を代表する全国的知名度を誇るまち、と語りはじめる。

サーフィン、加山雄三、サザンオールスターズ、姥島(えぼし岩)といった都市資源のイメージから、「茅ヶ崎といえば、海」の印象が強いが、北部には豊かな里山の自然環境や、平成 27 年(2015 年)3 月に国史跡に指定された下寺尾官衙遺跡群をはじめとする貴重な歴史遺産が存在する。

また、東京まで約 1 時間、横浜まで約 30 分という交通の利便性から、都心で働く人々のベッドタウンとして急激に都市化してきた経緯があり、平成 22 年(2010 年)時点での昼夜間人口比率(夜間人口に対する昼間人口の割合)は 79.6%と低く、居住主体の住宅都市であることを示している。

35.76 km²というコンパクトな面積に、「海・まち・山」が共存しているまちである。先祖代々住まう人々、別荘兼住宅地として発展した明治・大正期前後に来られた人々、戦後復興期から高度成長期に地方から来られた人々、近年「湘南」に憧れて移られた人々など、住民の背景やライフスタイルも多様である。

「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」事業(以下、丸博)が近年、さまざまな方々から評価をいただくようになってから、毎年、全国各地からお越しになられる事業視察等の対応をさせていただき、当市の特徴について、まずそのように説明をはじめ(=写真 1)。

丸博は平成 15 年(2003 年)12 月に事業の検討が開始され、平成 18 年(2006 年)4 月に策定された「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館事業の指針」に基づき、市の施策として、市民と行政の協働事業推進体制で活動が進められてきた。「指針」では、丸博

を「本市全域を建物のない博物館と見立て、文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材等を幅広く抽出し(これらを都市資源と呼ぶことにしました)、調査・研究し、魅力を整理・周知し、相互的に関連づけ、活用を図る」ものと説明しており、その理念を具現化するためにまち歩きや講座をはじめとする多岐に渡る活動を展開している(=写真 2)。

都市資源を活用し、地元の人々の「ふるさと」意識を醸成する「エコミュージアム」という概念を、昔から変わらぬ風景と生活様式を色濃く残す、都会から離れた地方の田園地域のような場所ではなく、住まう人々の背景や価値観が多様なベッドタウンで導入し独特の展開をしている(しかも、対象領域を市域全体に設定している)ことは全国的に見ても先駆的な試みと考え、「都市型エコミュージアム」と名付けている。

2. 活動の歴史

丸博の活動の歴史は、実践と試行錯誤の歴史である。「茅ヶ崎市全域を壁のない博物館にする」という壮大な概念をどう体現するか、「指針」を基に、実践しては壁にぶつかり悩み、その都度、それぞれの得意分野や愛するものを生かして活躍する市民ボランティアが現われ、道を切り拓いてきた。多様かつ膨大な数の、その活動の歴史すべてに言及することは到底できないので、特徴的な活動や事柄を紹介していく。

平成 17 年(2005 年)9 月、市教育委員会主催で、市内の都市資源を学び紹介する市民育成のための「ガイド養成講座」がスタートした。月 2 回のペースで講座やフィールドワークを行い、第 1 期が平成 17 年(2005 年)から 20 年(2008 年)まで、

第2期が平成21年(2009年)から23年(2011年)までと、約3年間という長い周期で行った。

講座のテーマは「石造物」「古民家」「歴史(近世)(戦中・戦後)」「農業」「観光」「海浜植物」「映画」「ガイドの役割と話し方」など多岐に渡り、フィールドワークも「別荘のあった頃が偲ばれる高砂緑地」「柳島の歴史と景観を訪ねるー藤間柳庵翁の残した歴史」といったタイトルで市内全域を巡った。

講座の修了生はその後、平成20年(2008年)9月にボランティア団体「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会」(設立当時の名称は「土曜会」)を設立。市唯一の登録博物館である茅ヶ崎市文化資料館で定例会を行い、まち歩きガイドの受託を軸に、事業実践の中核的役割を担っている。この時代に培った基盤が、現在の丸博の活動の成長をしっかりと下支えしている。同会が実施する「茅ヶ崎の大山道を歩く」「香川・下寺尾の歴史を訪ねて」「丸ごと高砂緑地」「南湖院の時代を訪ねて」などといったまち歩き企画は、茅ヶ崎の都市資源を知る定番コースとして市民に親しまれている(=写真3・4)。

しかしながら、多様な背景と価値観を持ち、それぞれが愛する都市資源を調査研究し、その魅力を発信する活動をしている市民が、茅ヶ崎市内にはたくさんおられる。エコミュージアム「的」と呼べる市民活動も大変活発である。それらが多様性を認め合い、ネットワークとして有機的につながり、同会もその中の1つとして得意分野を生かすようになってこそ、茅ヶ崎市の「まち全体が丸ごと博物館になる」という概念の実現に近づくものと考えられる。

そのような考えから市教育委員会は、平成23年度(2011年度)、これまで地道に掘り起こしてきた都市資源と、地道に積み重ねてきた成果・実績を土台に、事業スケールを上げ、さらにより多くの市民を巻き込んでいく方向性を打ち出した。

そして、平成24年度(2012年度)、その方向性に基づき、エコミュージアム「的」活動のネットワークにおける事務局機能を企図する「ちがさき

丸ごとふるさと発見博物館アクションプロジェクト」を立ち上げた。アクションプロジェクトは「指針」の理念を具現化すべく、「運営部会」「調査研究部会」「ガイド部会」「広報部会」「こども部会」を置き、教育委員会の社会教育課長を「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」の館長に置き、各分野で市民ボランティアが行政と協働し、都市型エコミュージアムの完成に必要な事業メニューをそろえることを目指している。

そして、それら部会の活動や、地域で都市資源を生かした活動をしている多様な主体をゆるやかにつなぐ場として、平成24年度(2012年度)企画展「つながるちがさき」(平成24年(2012年)11月22日～平成25(2013年)年1月27日)、平成25年度(2013年度)企画展「つながるちがさき2013」(平成25年(2013年)10月16日～12月21日)というイベントを設定。「エコミュージアムの企画展」として大々的に展開した(=写真5)。

「企画展」は、ある一定期間内に実施される年中行事やお祭りなど、茅ヶ崎について知ることができる機会を、企画展ガイドブックにまとめることで一体的に発信し、ふだんなにげなく暮らすまちで、市民が回遊し、魅力の再発見を促すことを目的とする丸博独自のキャンペーン事業である。市内全域に点在する商店や公共施設を活用したスタンプラリーなどを実施し、それまで丸博を知らなかった市民の認知度を高める成果を得た。

従来型の博物館に、平時に行う「常設展」と期限やテーマを設けて特別に行う「企画展」があるように、エコミュージアムでもスポット的な「企画展」を開催したことは、お祭りのような事業の活性化と多様な主体の交流を生んだ。

「土地の人間ではないので、今まで行ったところのないところに行けてよかった。(60代・男性)」
「茅ヶ崎に40数年住んでいるが初めていくところが多かった。昔と道が変わっていて迷うことが多かった。またぜひやってほしい。(60代・男性)」
「ふだん行かないところに行けたし、途中で気づくものがあったりしてよかった。(40代・男性)」といった感想は、多様な属性と

価値観を持つ約 24 万人の市民の多くが、「住まう地域を知らないから、知りたい」という共通意識を持っていることを明らかにしている。行く先で市民同士の会話があったり、住んでいる茅ヶ崎なのに知らなかった場所を訪れたことで身近な発見があったり、地域の「つながり」を感じられる機会は、都市型エコミュージアムだからこそ提供できる価値である。

企画展はさらに進化し、平成 26 年度(2014 年度)には「丸博が、100 日間で 100 の茅ヶ崎を知る機会を提案する」というテーマで、企画展「丸ごと 100 -茅ヶ崎を知る 100 の機会-展」(平成 26 年(2014 年) 11 月 21 日～平成 27 年(2015 年) 2 月 28 日)を開催した。24 年度と 25 年度の期間が 67 日間だったところを 100 日間にまで延ばし、まち歩きや講座等で提案する「機会」の数も 100 にする、というインパクトがあり、わかりやすいコンセプトを設定したことが功を奏し、国内だけでなく国外からの視察が来られるなど、市民ボランティアも確かな手応えを得た企画展となった。

3. 都市型エコミュージアム拠点実験「丸博センター」へ

平成 27 年度(2015 年度)は、過去 3 年間とは異なる、新たな企画展のスタイルに挑戦した。「市民ボランティアてづくりのエコミュージアム拠点実験」をテーマに、平成 28 年(2016 年) 1 月 28 日から 2 月 1 日までの 5 日間、J R 茅ヶ崎駅前の茅ヶ崎市民ギャラリー4 階・5 階を会場とし、企画展「期間限定！丸博センターへようこそ！」を開催した(=写真 6～10)。

既存の文化施設である茅ヶ崎市民ギャラリーを「丸博センター」と名付け、1 年を通じて市内全域で繰り広げられている丸博の活動を、あえて「箱」に集約し、来場者にショーケース的に体感してもらうことを試みた。「相模湾」「自転車」「堤貝塚」「子育て」など 18 の講座、丸博センターを出発点にした市内の「別荘地」「東海道」などを巡る 5 つのまち歩き企画に加え、2 つの展示にも取り組んだ。

従来型の博物館とは違う、エコミュージアムならではの、丸博ならではの展示アイデアを生み出すのは、まさに悩みに悩む作業であった。そして、ほぼ毎週、夜に行ってきた市民ボランティアと担当職員による運営部会の話し合いから生まれたアイデアの結晶として、屋根も壁もない博物館であるエコミュージアムがあえて「箱」に入る、新たな企画展が実現したのだった。

「多様なものの見方を喚起する展示」「現地へ行って完結する展示」「市民それぞれのまちの宝ものの展示」「茅ヶ崎全体の都市資源を集約した展示」など、市民ボランティアがそれぞれに描くコンセプトを結集し、約 120 m²の 4 階展示室には「下寺尾官衙遺跡群」「中央公園のクマゼミ」「昭和 30 年代の茅ヶ崎」「“南側”の近現代遺産」という、ジャンル・地域・時代が違うテーマで、同時開催の講座やまち歩きの内容とリンクする 4 ブースを設定し、展示をつくりあげた。

また、壁面いっぱい「茅ヶ崎の都市資源であること」だけを共通テーマにした写真をランダムに並べた「ちがさき丸ごと写真展」、ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会がガイド役となって市内を案内するテレビ番組を映写した「動画 de 丸ごと博物館」も実施。各コーナーで、来場者がポストイットで感想やキャプションを書けるようにし、展示を通じた市民同士の交流も行った。

5 階では、エコミュージアムの「理念」「活動」を展示する「丸博を知る 16 のキーワード」を開催。市民ボランティアてづくりの 16 個の什器に、「ちがさき丸ごとふるさと博物館」の 16 字にまつわるモノやコトを展示した(たとえば、「ち」は「茅ヶ崎市史」の冊子を、「が」はまち歩きガイドの様子をデジタルフォトフレームで展示)。

「丸ごと発見写真展」は、茅ヶ崎のさまざまな都市資源と丸博の活動そのものをずっと記録してくださっている 1 人の市民ボランティアの写真を中心に構成し、写真がとても美しいので「とにかくたくさん並べよう！」と動き出した。「すべて茅ヶ崎の写真」という共通性をもつ、地域も季節も時代も異なる写真たちをランダムに並べる

ことで、来場者それぞれの茅ヶ崎への思いを喚起したり、そこから会話がふくらむようにしたりしたいと考えた。

しかしながら、丸博は、専門業者が立派なパネルを製作する従来型の博物館のような潤沢な予算はない、市民ボランティアでつくりのエコミュージアムである。そこで、写真は家庭用プリンターで出力したものを1枚1枚ラミネート加工し、それらを養生テープで貼りあわせたものを壁面から吊るして展示した。300枚以上の写真群は非常に迫力があり、来場者から「写真をポスターやポストカードにしてほしい」といった感想が出るほどに好評を博した。

予算はたくさんあるに越したことはないだろうが、いつからか、丸博では、予算が少ないことすらものしんで、ものづくりをしているように思う。あるものを使って、持っているものを活用して、なにかたのしいものを生み出す。それは、身近過ぎて、普段は見落としがちな、住まう茅ヶ崎の都市資源を発見し、その魅力を深掘りする丸博の理念を、ある意味、表現しているといえるかも知れない。

企画展終了後、ある市民ボランティアが語ってくださった「博物館展示の主役は展示物であり、そこには伝えるべき明確なテーマが存在していますが、エコミュージアム展示の主役は鑑賞者（と市民学芸員）であり、そこには決まった答えが存在せず、展示物は“人と人とをつなぐきっかけ”であったように思います」という感想は、皆が悩みに悩んだ「エコミュージアム展示とはなにか」という命題に対し、実践から1つの答えを見出したことをよく表している。

また、「拠点機能」の必要性は事業開始当初から言われてきたが、約10年の活動の蓄積で浮き彫りになってきた「拠点」のイメージを、丸博センターは実現してみせることができた。

たとえば、5日間の期間中、毎日計5本開催したまち歩きでは、丸博センターを集合場所であり出発点としたことで、出かけていく参加者を市民ボランティアが「行ったらっしやい」と言って見

送ることができたことは、とても素晴らしい収穫だった。「行ってきます」と出発されて、まち歩きを終え、「ただいま」と帰ってこられる。そして、展示を鑑賞したり、講座に参加する方々の姿は、「丸博センターが、住まう茅ヶ崎を知りたいという人たちにとっての、ひとつの『ホーム』になる」という、開館する前にイメージしていた、理想のワンシーンを具現化したものであった。

「つながるちがさき」や「丸ごと100-茅ヶ崎を知る100の機会-展」といったそれまでの企画展は、100日間など長い期間にわたって、「茅ヶ崎の都市資源について調査研究し、その魅力を発信する活動」を一体的に発信するアプローチをすることで、多様な活動主体が「ちがさき丸ごと博物館という、同じ『場』にいる」という状態をつくった。ただ、同じ『場』にはいるけれど、異なる活動主体同士が実際に顔を合わせる機会や、企画同士がリンクするという機会は、実はそう多くはなかった。

それに対し、「丸博センター」という実体的な拠点があることは、実際に人と人や、企画と企画がつながるシーンをたくさん生んだ。ちがさき丸ごと博物館講座の講師やまち歩きガイドが、「ちがさき丸ごと博物館工房」で出会って話したり、それぞれの企画に参加したりして、「交流」「つながり」といったものを具現化できたことも特筆すべき成果であったといえる。

こうして振り返ると、丸博の活動の歴史において、講座や企画展から事業に参画した多くの市民が、事業の担い手となり、無数の都市資源とエコミュージアムを構成する要素の中から、「都市型エコミュージアム」を具現化するものとして、選び取ったものの表象が、「丸博センター」であったといえる。

また、平成28年度(2016年度)は、平成26年度企画展「丸ごと100」に、平成27年度企画展「丸博センター」を加えたスタイルの企画展「丸ごと101-茅ヶ崎を知る101の機会-展」(平成28年(2016年)11月25日～平成29年(2017年)3月5日)を開催し、これまで以上に多くの市民

ボランティアの参画と盛り上がりを見せ、さらなる進化を確実に実感するものとなったが、こちらはまた別の機会に報告させていただきたい。

4. ちがさき丸ごと博物館講座（基礎編）

また、平成 25 年（2013 年）からは、「住まう茅ヶ崎について 1 から学びたい」という市民ニーズに応えるべく、「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館講座（基礎編）」を開始。平成 28 年（2016 年）秋期の開講により、6 シーズン目を迎えた人気企画になっている。

エコミュージアムの視点から、茅ヶ崎の歴史、文化、自然、民俗などの都市資源の総論を学び、どのジャンルで学びを深めていくにも役立つ基礎知識を身につけることができる。かつての「ガイド養成講座」とは違い、約 3 か月の短期的周期で行い、受講生が修了後にスムーズに活動の担い手側として事業に参画していける仕組みも用意している。

何期も開講するうちに、いつしか自然発生的に、過去の講座の修了生たちが、会場設営や撤収、受付、資料配布などの運営補助をするようになり、平成 28 年（2016 年）9 月には、同講座の修了生による同窓会組織「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館友の会」が設立された。同会は、会員相互の懇親を深めるとともに、同講座運営の参画だけではなく、さまざまなかたちで自主的に丸博の活動全体を支援する応援団となっている。

また、同じく平成 28 年（2016 年）9 月から、時間的・物理的都合により、会場で同講座を受講できない方々でも、インターネット環境さえあれば、講座をいつでもどこでも受講できるウェブサイト「Maruhaku TV（マルハクティービー）」をグランドオープンした。（<https://www.maruhaku.tv>）。スマートフォンからも視聴でき、レポート提出フォームから質問をすることもできる。「ふるさと発見」というテーマからアナログ的なイメージを持たれがちな丸博であるが、高度情報化や都市が抱える現代的課題に対応した手法を活動に取り入れている。

講座の受講者の多くは、長年茅ヶ崎に住んでいたが、改めて振り返り（会社を定年退職するなどして）、自分自身が住む地域のことを何も知らなかったことに気づいたことを、受講のきっかけとしている。都市部においてはそのような市民が多くいる一方、これまで暮らしてきた地域の魅力を伝えたいと思う古くからの市民も存在し、講座事業はそのように多様な価値観をもつ市民同士をゆるやかに「つなぐ」場としても機能しているといえよう。きっと、これからたくさんの人々をつないでいくに違いない。

5. 「都市型エコミュージアム」のこれから

丸博は、多様な事業メニューを用意し、市民が自然と段階的に地域を知っていき、住まう地域について考え、その魅力を発信するようになる仕組みを、市民が共通して感じられるであろう「地域を知るたのしさ」を推進力に置くことで、形成しはじめている。市民ボランティアからの自発的で創造性豊かな新企画も次々に生まれている。

「たのしさ」にも、一人一人が地域を知っていき自分の知識欲が満たされていく「楽しさ」、それをさらに深掘りしていく中で自らが地域や他の市民とつながっていく「悦しさ」、そして住まう地域で自分が残したい、後世に伝えたい「わたしの都市資源」を見つけ、それを他の市民と語り合い学び合い「わたしたちの都市資源」を見出し選び取っていく「愉しさ」という「段階」があるのではないかと考えている。

それは博物館機能でいう「教育普及」を受ける「楽しさ」、「調査研究」をする「悦しさ」、エコミュージアム全体として地域に本当に価値あるものは何かと選び取る「収集保管（保存）」をする「愉しさ」、そしてまた今度は「教育普及」を行う「楽しさ」、などという風に言い換えることもできよう。

市民は住まう地域を知っていく、ゴールのないエコミュージアムの「たのしさ」のサイクルを、体験をし続けることで「まちの学芸員」になっていく。現在、丸博は、この構造について常に意識

し、実践を続けている。

また、近年、各地で蓄積されてきた「居住文化」が変容と均質化の波にさらされているといわれている。都市においてはそのスピードが速く、住宅都市である茅ヶ崎市もまた、たとえば南部の別荘文化の風情や松の緑が失われてきており、そのまちなみの保存・保全は大きな都市課題である。

そこで今後、都市型エコミュージアムに関わる市民が、当事者意識を持って具体的にどのような「わたしたちの都市資源」を選び取り、どのような保存・保全活動に取り組んでいくかは、また実践から話し合い、見出していくことになるだろうが、選び取るのに必要な情報と手法を得るための「住まう茅ヶ崎を知る機会」を、丸博は手を変え品を変え提案していく。そして、「住まうまちを知る機会がもっとも開かれているまち」になることから、無数の現代的都市課題に向き合っていけるのではないかと考えている。

国内外から丸博を視察に来られる方々が、口をそろえておっしゃるのは、丸博に関わる市民ボランティアの方々の行動力や創造力への感動と敬意のことばである。茅ヶ崎のもっとも誇るべき都市資源のひとつは間違いなく「人」という宝であり、その個性あふれる宝でいっぱい丸博は、これからも多様性を認めているからこそその紆余曲折を経ながらも、さらに進化していくだろう。

エコミュージアムとは非常に「わかりにくい」概念である。概念をかたちにしようと一所懸命活動をしていて、目に見える成果がなければ活動の手応えがなく不安にもむなしくなることもある。しかし、その「わかりにくさと向き合うこと」「不安とむなしさに焦燥すること」も、都市型エコミュージアムを構築していく上で必要な通過儀礼なのではないかと、これまでの実践を通して考える。

都市部においても市民の「地域を知りたい」という欲求は確かに存在し、むしろ農山村部より地域とのつながりの実感が薄い都市部のほうがその欲求は強いといえよう。

多様な属性と価値観を持つ市民が多い都市部には、切迫した単一の地域課題といえるものはない

かも知れないが、それは様々な地域課題や都市資源について語れる主体がたくさん存在することを示している。そうした市民の潜在的な得意分野や愛着心を発掘しメニュー化し、総合的に博物館機能を活用した「地域をたのしく知っていくシステム」の形成を目指すアプローチが、有効なエコミュージアムづくりの手法だと丸博は提案する。

もちろん、このスタイルもまた数ある手法のなかの1つであり、これからの社会環境の変化に合わせて、運営体制を含め大いに変容していく可能性が十分にある。エコミュージアムとは、決定されたゴールはない、住民自身が自発的な環境デザイン力を高めるようになるための社会教育であるからである。

本稿作成にあたり、ともに丸博の「今」を創る市民ボランティアの皆様をはじめ、丸博を築き上げてこられたすべての皆様に、改めて敬意を表するとともに、心から深く感謝いたします。

* 茅ヶ崎市教育委員会社会教育課

参考文献

- ・茅ヶ崎市教育委員会『ちがさき丸ごとふるさと発見博物館事業の指針』茅ヶ崎市教育委員会、2006年
- ・茅ヶ崎市教育委員会『ちがさき丸ごとふるさと発見博物館季刊誌第23号、第24号～第27号』茅ヶ崎市教育委員会、2015年～2016年
- ・茅ヶ崎市『茅ヶ崎市人口ビジョン』茅ヶ崎市、2016年
- ・大原一興『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会、1999年
- ・大原一興『都市におけるエコミュージアムの課題と展望』情報誌CEL(Vol.76)、2006年
- ・岩橋恵子『フランスにおけるエコミュージアム運動の歴史的展開とその特質』鹿児島女子大学研究紀要、1996年
- ・丹青研究所編『ECOMUSEUM～エコミュージアムの理念と海外事例報告～』丹青研究所、1993年
- ・新井重三『実践エコミュージアム入門 21世紀のまちおこし』牧野出版、1995年
- ・馬場憲一『地域文化政策の新視点－文化遺産保護から伝承文化の継承へ－』雄山閣出版、1998年



（写真1）全国各地から訪れる丸博への視察には、市民ボランティアと担当職員が協働して対応する。



（写真2）多岐に渡る活動の中でも非常に人気の高いちがさき丸ごと博物館講座の様子



（写真3）ちがさき丸ごと博物館まち歩き「茅ヶ崎の大山道を歩く」



（写真4）ちがさき丸ごと博物館まち歩き「南湖院の時代を訪ねて」



（写真5）平成24年度企画展「つながるちがさき」オープニングイベント

平成27年度企画展「期間限定！丸博センターへようこそ！」（平成28年1月28日～2月1日）より



（写真6） 「ちがさき丸ごと写真展」



（写真7） 市民ボランティアの多様なアイデアが結集した、エコミュージアム展示



（写真8） テーマの異なる4つのブース展示を中心にして、茅ヶ崎の都市資源を総合的に表現した



（写真9） レセプションの様子。期間中、同会場で18の講座を開講



（写真10） 理念展示「丸博を知る16のキーワード」